$0.8+(0.2+0.3)\times 1.8=1.7$万円/個

となる．したがって，取引⑧の流量は

$800\times 1.7=1360$万円

になる．

取引⑨：取引⑧のところで求めた製品1個当りの原価を用いると，

$700\times 1.7=1190$万円

が取引⑨の売上原価の流量になる．一方，この売上原価に対応する収益は明らかに2660万円である．

このようにして図5の資本の流れ図の矢印の値を求めて記入し，各々ストックと出入口の当期末有高の記入も完了すると損益計算書と貸借対照表を作成することができる．それらを**表3**，**表4**に示しておこう．

「北越雪譜」

森　雅夫

トンネルを抜けると，空はからりと晴れて，そこは空っ風の里であった……．大学受験の2月に「雪国」とは逆向きに，はじめてトンネルを抜け出たときの驚愕と開放感は今もあざやかである．その年は，正月から一晩に5尺もの降雪をみる日もあった．夜半，窓越しに天を仰ぐと，音もなく降りしきる雪に，朝までには埋れ死ぬような恐怖すらおぼえた．

20年近くも温暖な三浦半島で暮すと，そんな雪への情感も，すっかり遠いものとなった．

「北越雪譜」の著者，鈴木牧之は，明和7年(1770)，越後の国，魚沼郡塩沢村の縮仲買商，兼質商の家に生れ，天保13年(1842)に73歳で没している．「雪譜」は牧之得意の画を折り込んで，魚沼の風土・生活・雪話を記録したものであり，随所に科学的な考察が見られる．牧之25歳のときに，珍しがり屋の江戸っ子に売り込むべく「雪中之奇談」と題して企画されたが，永らく日の目を見なかった．その後，幾多の曲折を経て，牧之68歳のときに，内容と表題を大きく改めて，山東京伝の息子，京山の手でようやく初編三巻が出版された．

京山はその序に「今日，軽薄な武士の子弟は，わずかな雪が急に，粉々と空に舞うと，さっそく彫りもの入りの鞍に高価な勒をつけて，玉塵をまきあげて郊外を疾走し…(中略)…．今，もしそういう人たちに『北越雪譜』を読ませれば，これによって凍え飢えることの苦しさを考えるだろう」(教育社新書，原本現代訳より)と，述べている．鞍をスキーに置き換えれば，雪を見る表と裏の違いは，今とて変るものではない．

雪譜2編，7巻，123条(岩波文庫，岡田武松校訂より)の題を適当に拾い出すだけでも，雪の気が迫る．すなわち，地気雪と成る弁，雪の形状，雪の深浅，雪意，雪の堆量，雪竿，雪を払ふ，雪蟄，雪中の洪水，雪中の虫，雪吹，雪頽，雪中の戯場，家内の冰柱，雪中歩行の用具．雪による難儀を説き，楽しみを語り，さらには雪の効用にも触れる．

雪の育てた産業，縮についてはことの外愛着深く，越後縮，縮の種類，縮の紵並紵績，織婦，御機屋，縮を曬す並縮の市などの条がある．縮を織るには魚沼の湿った雪の冷気の作用が欠かせぬこと，またその作業の工数の多さを数え，他人を雇っても採算がとれないこと，それ故の家内の仕事であることなどを切々と説く．

雁や鮭などの習性，その漁法も詳しい，雁の代見立，雁の総立，鮭の字考，鮭を捕る打切並つづ，搔網，鮭の洲走．牧之の若い頃に比べ，数が半分に減ったと嘆き，漁獲制限を説くなど今風である．一方，鮭の上らぬ川に受精卵を移す夢を語る．

雪譜を眺め返すうちに，雪払い，雪堀，堀揚，雪下ろしのハードとソフトが時代と共に，あるいは町中と村とによって，どのように変遷してきたかに興味がわく．また，牧之の時代，あるいは住む村に無かったのか，雪譜に見当らぬが，雪庇(雪室の屋号かも知れない)に働く人々の光景がなつかしく憶い出された．それは，夏の魚のための，ピラミッド型で藁茸きの巨大な貯雪小屋に雪を積み上げる作業である．

雪譜は，私を再び雪国につれもどしたようである．

© 日本オペレーションズ・リサーチ学会．無断複写・複製・転載を禁ず．